

その49—緊急地震速報とは、

「滅災」を旨とする気象庁の緊急地震速報は八月二十八日現在で、全国で大学や鉄道会社、電力会社など八十幾機関が先行的に提供を受けている。ただ地震発生までは一般の人に知らせないよう求めるという旨は情報上の正確性の問題もあり、各機関とも活用法に試行錯誤を続けている。

二秒。

●工業大学では、通信Eから一週間かに、全

●員と販売店などの業者を

●集めて計四回、研修を

●追退や避難に利用する

●教授表示

●0.情報

●1 2 3 4 5 6 7

●0 0 0 1 1

●JST 2006

結果、走行中の電車の場合には緊急停止させる信号を受信しました」とトナウンスするだけで、地震が発生したことは知らないこととした。「地震の発生を知らせれば、乗客がどのような行動するかは予想可能。不測の事態を防ぐには、れしかなかから止まったら各客ごとの対応の仕方については今後も議論を重ねていく。

同大では、六月二十

旅ハバニは学内で実際にサイレインを鳴らしたの程度聞こえるのか実験もしてみた。九月には学生を含めた防災訓練も予定している。同大地域防災研究所センター長を務める正木和明教授は「学内の危険箇所の把握や備蓄の意識が高まり、関心は予想以上に高まった」と効果を話す。

しかし、気象庁の配信する情報は震源と発生時間、マグニチュードの間、大きな揺れがくる時間と正確な震度などは情報の受け手が解析しなければならぬ。「予測と

例などにあたる。一五秒でも十秒でも早く地震の到来が分かれば心理的に余裕もできる。発電所のは運転員を含め、従業員の安全を守るには有効」と土木建築部技術・企画グループの高橋正副長は話す。

ただ、今のところ発電を止めるなどに使つては考えていない。原子力発電所には独自に地震計を取り付けており、大きな地震の場合は自動的に止まる仕組みになっている。「かつて地震速報には誤報もあった。気象庁からの情報の正確性を

現場で今後も検証を進めていきたい」といっ
つ。
象庁は本年度末ま
でに、国民一般へ
の速報の提供を目指して
いるが「年度末は難し
い」との観測も出てい
る。気象庁が恐れてい
るのはパニックや混乱
の「国民への提供にはこの
システムの周知徹底が必
要」といっ
つかし、専門家の間で
は「パニックを恐れすぎ
では」との批判の声もあ
る。八潮弘忠・東京女子
大教授（災害心理学）は
「警報を出せばある程度
は（大きな）パニック
を防ぐために必要であ
る。本格運用するにあつ
ては「誤報があり得るこ
をしっかりと伝えておく
とが大切」と話す。
神戸市在住の俳優で
被災者を支援するNPO
法人「阪神淡路大震災
・17希望の灯り」代表
堀内正美さんは「誤報
恐れないことが大切。誤
報は多すぎてもいいけ
な、ある意味、訓練に
なるし、人々が自主動
たか検証するデータに
なる。今まで防災に於
ては社会的実験をして
なかつた。これを実践

[illegible]

危険回避



軽微な重要データ
作業者の安全確保

活用予定はない。速
には「もっとも情報が
要な場所では間に合
ず、間に合う場所では
要のない情報となり
ち」(岡田義光・防災

れによって防衛態勢も取
ことは目的でもある。そ
が、ショックを与える
れによって防衛態勢も取

(社会部・岩佐和也

緊急地震速報 地震の際、直後に発生する大きな揺れのS波（主要動）は、地中を伝わる速度が速いためその時間差を利用する。震源に近い観測点でP波（微小動）が来た時に震源、地震の規模（マグニチュード）、各地のおおまか揺れの強さ（震度）を推定し、S波が来る前に速報として発表する。



中 部電力(名古屋市中)は、速報を主として従業員的安全確保に活用する考えだ。同社の土木建築部にある専用受信装置で気象庁からの配信を受けた後、浜岡原子力発電所(静岡県)、川越火力発電所(三重県)など四力所に情報を発信。従業員や来訪者の安全確保のほか非常用電源の確

震源の近くで地震波を観測

気象庁

緊急地震速報発表

活用

防災関係機関

迅速な災害対応

交通機関、エレベーター等

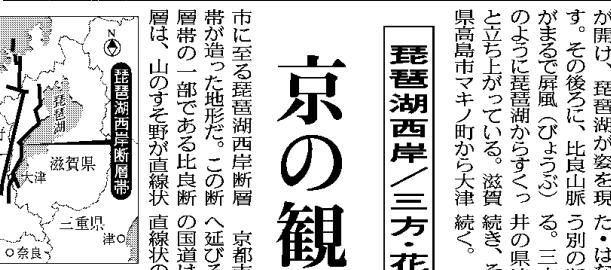
緊急停止に要する

企業、工場

生産設備の被害のバックアップ

※気象庁の報道発表資料を参照

5

[illegible]

名古屋へ向かう新幹線を、をなし、遠方からのもはつきに沿い。南禅寺の東を通帯と花折断層の中南部は、都駅を発車する。トネリと分かる。比良山脈の後り、清水寺のおもむきから桃寛文の地震では動いていない二つ抜けると急に視界ろには、三方・花折（みか）山御陵を通して宇治に続い。ここはうきは静かなるの後に、琵琶湖が姿を現した。（なおそれ）断層帯といひ地巡りが進むなら観光だけにこの大地断層が心配だ。琵琶湖西岸断層帯で、いままで屏風（びよふう）なる。三方断層は京都と福文二（一六六〇）年、三方確率は最大で9%。日本の断層と花折断層北部の活動活断層の中でも高い部類に属し、推定されるマグニチュードⅤ7.3-7.6の地震が発生した。市街地に入り込んで、滋賀県と京都府を中心とする。京都市内には四十もの

名古屋へ向かう新幹線が、をなし、遠方からのもはつきに沿い。南禅寺の東を通帯と花折断層の中南部は、都駅を発車する。トネリと分かる。比良山脈の後り、清水寺のおもむきから桃寛文の地震では動いていない二つ抜けると急に視界ろには、三方・花折（みか）山御陵を通して宇治に続い。ここはうきは静かなるの後に、琵琶湖が姿を現した。（なおそれ）断層帯といひ地巡りが進むなら観光だけにこの大地断層が心配だ。琵琶湖西岸断層帯で、いままで屏風（びよふう）なる。三方断層は京都と福文二（一六六〇）年、三方確率は最大で9%。日本の断層と花折断層北部の活動活断層の中でも高い部類に属し、推定されるマグニチュードⅤ7.3-7.6の地震が発生した。市街地に入り込んで、滋賀県と京都府を中心とする。京都市内には四十もの

名古屋市中心から大津 続く。

高島市マキノ町から大津 続く。

琵琶湖西岸／三方花折断層帯

直下型は発信間に合わせ

活用への検討課題

誤報多発、推定震度の誤

直下型地震の場合、震源の真上付近では、速報の発信が、大きな揺れの到達に間に合わないことが多い。二〇〇四年二月からの試験運用中の約二年四月の間に、二カ所以上の観測点のデータから最大震度が5弱以上と推定した十五回の緊急地震速報のうち、震源に最も近い地点が大きく揺れ

直下型地震の場合、震源の真上付近では、速報の発信が、大きな揺れの到達に間に合わないことが多い。二〇〇四年二月からの試験運用中の約二年四月の間に、二カ所以上の観測点のデータから最大震度が5弱以上と推定した十五回の緊急地震速報のうち、震源に最も近い地点が大きく揺れ

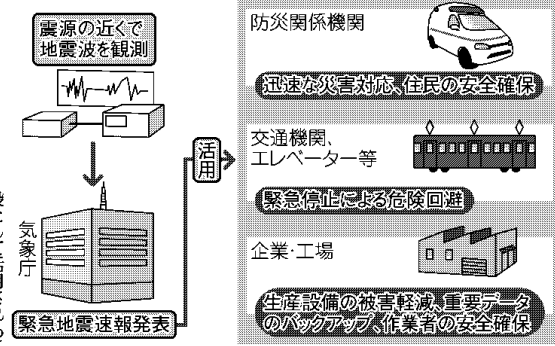
伝えるかが問題」と提言する。また「高速道路を走っている人にラジオから流した場合、聞いていない人といない人がバラバラに行動したらどうなるか」とし、情報の活用を周知徹底する重要性を指摘する。

気象庁地震火山部管

課副時地震情報調整官

高藤誠さん（緊急地震

さまざまな検討課題も残った。いすいでなくも非常に近い時間で提示されるのが問題と捉えられた。また「高速道路の発信が、大きな揺れの到達に間に合わないことが多い。二〇〇四年二月から試験運用中の約二か四方の間に、二カ所以上の観測点データが最大震度五弱以上と推定した十五回の緊急地震速報のうち、震源に最も近い地点が大きく揺れた」と、情報活用課副課長は「緊急地震速報のねらいは、震源に最も近い地点が大きく揺れた」と指摘する。



※気象庁の報道発表資料を参照

来が十分であれば心理的に
 余裕もできる。発電所の
 転員を含め、従業員の
 安全を守るには有効と
 未建築部技術・企画
 一ツの高級正副長は話
 取。電所には独自地震計
 取り付けており、大き
 地震の場合は自動的に
 まる仕組みになっている
 一。かつて地震速報に
 気象庁速報もあった。気象庁
 らの情報正確性をど
 評価したいのかの検
 することも課題にと
 副長。「たまたまの速
 活用法については各

だ、今のように発電
 止めるなど使うこと
 考えていない。原子力
 取り付けており、大き
 地震の場合は自動的に
 まる仕組みになっている
 一。かつて地震速報に
 気象庁速報もあった。気象庁
 らの情報正確性をど
 評価したいのかの検
 することも課題にと
 副長。「たまたまの速
 活用法については各

気象庁は本年度末ま
 でに、国民一般へ
 の速報の提供を目指し
 ている。一度度までは難し
 い」との観測も出てい
 る。気象庁が恐れている
 のはパニックや混乱
 システムへの提供にはこの
 システムの周知徹底が必
 要という。
 しかし、専門家の間で
 はパニックを恐れすぎ
 では」との批判の声もあ
 る。広瀬弘忠（東京女子
 大教授・災害心理学）は
 「警報出せばある程度
 混乱するのは避けられな
 いが、ショックを与える
 ことは目的でもない。そ
 れによって防御態勢も取

れるのだから、指摘
 の方が大きい」と指摘
 本格運用にあたっては
 「誤報があり得ること
 をしっかり伝えておく
 とが大切」と話す。
 神戸市在住の俳優で、
 被災者を支援するNPO
 法人「阪神援路大代表
 ・17希望の灯り」の
 堀内正美さんは「誤報
 恐れないことが大切。誤
 報は多すぎてもいいな
 が、ある意味、訓練に
 なるし、人々が行動
 するための一歩にな
 る。今まで防災につ
 ては社会的実験をして
 きた。これを実践し
 るために、情報は積
 的に出していってき
 たい」と話している。
 （社会部 岩佐和也）